

## ペルーと日本を「移動する子どもたち」の学校生活と アイデンティティの揺らぎ

－いじめ、適応にあたっての困難な体験からの考察－

### Peruvian School Life and Fluctuating Identity of Transnational Children between Peru and Japan

－Focusing on problems of adaptation and bullying－

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス  
Rosa Mercedes OCHANTE MURAY

#### 要旨 (Abstract)

本研究ではペルーと日本の二国の中で移動した経験のある子どもたちの学校生活に焦点をあて、両国の教育制度を経験している子どもたちからみた、日本の学校、ペルーの学校についてインタビューを行った。彼らの移動のストーリー、語りを引用しながら、日本からペルーに帰国後の適応の過程、両国で苦痛に思った体験、アイデンティティの揺らぎについてまとめている。

両国を知っている彼らの体験を通して、現在日本の公立学校で勉強している多様な子どもたちをサポートし、アクセスしやすい学校を作るためのヒントを得られるのではないかと考える。

キーワード：(学校生活) (いじめ) (アイデンティティの揺らぎ) (移動する子ども)

#### I. 研究目的

南米からのデカセギ現象が始まり、約30年経とうとしている。一時的な「デカセギ意識」から日本での生活をへて定住を決め、3世代に渡って生活している家庭もいれば、新しく来日する者も増えてきている。

今年(2011年)は2008年の世界同時不況から10年、厚生労働省が始めた「日系人離職者に対する帰国支援事業」の実施から10年を経とうとしている。リーマンショック後の製造業不況により多くの南米人が解雇されることになり、帰国を余儀なくされた。解雇され、帰国した在留外国人には南米のブラジル、ペルーからの労働者が最も多く、樋口が、「外国人人口のなかでも彼ら彼女らが雇用危機の生贄となった現実をはしなくも示している」と指摘している。(樋口2011)

また3.11の東日本大震災の不安な状況から、関東周辺の外国人の多くが帰国を決断し、子どもたちを連れて帰国している。

2008年のリーマンショック後、大きく減少していた在留ブラジル人数だが、2016年から増加傾向に転じ、2017年末現在191,362人<sup>1)</sup>となっている。ブラジルの不景気で安定した収入が得られず、生活が厳しくなっていることがその背景にある。一方在留ペルー人数は、最多を記録した2008年は59,723であったが、ブラジル人と同じく、世界的

な経済不況と3.11の東日本大震災の影響を受けて、それ以降減少し始め、2015年末現在では47,721人、2016年末現在48,098人、2017年末現在47,972人となりその数は大きく変動していない。

現在の在留外国人数は全体で256万1,848人と2013年から5年連続の増加傾向にある。

そうした中、親とともに選択の余地もなく出身国と日本を行き来する子どもが増えてきている実態は、『『移動する子どもたち』のこぼれの教育、日本語教育の研究』（河上、2009/2013）、「越境する若者と複数の『居場所』の存在」（額賀、2014）や「日系ブラジル人の事例からトランスナショナルな『居場所』における文化とアイデンティティ」（山ノ内、2014）などで取り上げられている。特に、「日本で学校へ通った経験がありペルーに帰国した日本帰りの子どものこぼれの教育」（河上、2009）や、ペルーと日本を行き来するこどもたちの学校・社会への適応、家庭と学校の環境及び帰国した児童生徒の間に存在する二重準拠の問題を指摘したスエヨシ・ヤギ（2011）及び田巻・スエヨシ（2015）などの先行研究は「ペルーと日本を移動する子どもたち」を考察する上で外せない先行研究である。

筆者は2013年に「不況後にペルーに帰国した日系の子どもたちの現状」というテーマで、世界的な経済不況と3.11の東日本大震災後に帰国した子どもたちの調査を行い、その現状を知るために、2013年3月にリマ市内にある「ラ・ビクトリア日系人学校」で働く日本語教師とカウンセラーにインタビューを行なった。

そこでは帰国生徒の受け入れにあたって、日系人学校が果たす役割を確認することができた。二つの言語を自由に使える環境が彼らにとって最も安心感を与え、それが適応し易い重要な要因であることが挙げられた（オチャンテ2013）。

前調査から5年経った今、ペルーに帰国した「日本帰り」の子どもたちの実態はどうなっているだろうか。本研究では、その実態に言及すると共に、日本の公立学校に通った経験があり、現在ペルーの教育を受けている、または社会人になっている子ども・若者の二国間での教育体験、彼らが見た日本の学校、適応、アイデンティティや進路に対する不安についてインタビューした。両国を知っている彼らの体験を通して、現在日本の公立学校で勉強している多様な子どもたちの適応過程を理解し、アクセスしやすい学校を作るためのヒントが与えるのではないかと考える。

## II. 研究方法

### 1. 調査概要

調査はペルーのリマ市で2018年3月1日から3月16日にかけて行った。インタビューを行った主な場所は、「ラ・ビクトリア日系人学校」や飲食店等である。

調査対象者として、日本とペルーの間で移動経験がある子どもで、特に日本の公立学校に通った後、親の都合でペルーに帰国し、現在ペルーで生活している帰国者である。

今回は「ラ・ビクトリア日系人学校」で勉強している児童生徒6人、そして現在専門学校や大学、社会人になっている青年5人、内「ラ・ビクトリア日系人学校」の卒業生2人、そして日系人学校に通わず、他の私立学校に通った経験のある3人の青年計11人の語りを紹介する。彼らの語りから見える課題を、適応しやすい環境作りへの手がかりにするため、二国の文化や価値観の元で育った彼らの帰国や新たな環境への適応にあたっての困難な体験や不安、アイデンティティの揺らぎ、ペルーと日本の学校生活についてなど半構造化された質問を行った。

---

1) 『在留外国人統計』各年次版

## 2. 調査対象者

インタビューでは、11歳から14歳の児童生徒6人、そして現在中等教育を卒業し、予備校、専門学校、大学や社会人になっている青年5人に30分から90分の間に渡って、聞き取り調査を行った。対象者の国籍はペルーであるが、中には日本の国籍を持っている者もいた。また日本では外国人集住地域に住んでいた者がほとんどであった。

児童生徒に対するほとんどの調査は日本語で行ったが、日本語を忘れ、スペイン語での方が得意な場合は、スペイン語で行った。青年5人とは、対象者の日本語能力に応じて、日本語とスペイン語で行った。ただし、スペイン語と日本語能力を測るためにも、筆者は両方の言語を使うことにした。また、対象者自身は無意識で会話の内容によって説明しやすい言語を使っていたため、対象者に合わせてインタビューの途中で言語を変え、両方の言語で実施した。インタビューの引用箇所は四角い枠に表記し、筆者の質問の自分が経営する店を持つ部分表は斜体で、省略している内容は・・・で表記している。スペイン語で行ったインタビューはプロトコルを筆者が翻訳して日本語で記している。

表1 調査対象者

事例	性別	国籍	生まれた国	年齢	帰国年齢	学年/職業	将来の夢
A	女	ペルー	日本	11	7歳	小6	ケーキ屋さん（日本とペルーのお菓子のフュージョン）
B	女	ペルー	日本	12	11歳	小6	アニメなどで絵を描く仕事
C	男	ペルー	日本	11	8歳	小6	スポーツ選手
D	男	ペルー	日本	14	10歳	中3	サッカー選手
E	男	ペルー	ペルー	14	9歳	中3	グラフィックデザイナー
F	女	ペルー	ペルー	14	11歳	中3	デザイナー・心理学
G	女	ペルー	日本	17	12歳	予備校	経済学
H	男	ペルー		21	13歳	大学生	国際ビジネスを通して両国の架け橋になる
I	男	ペルー	日本	22	14歳	専門学校	エンジニア
J	女	ペルー	日本	21	15歳	社会人	歌手
K	女	ペルー	ペルー	30	21歳	社会人	自分が経営する店を持つ

## 3. 「ラ・ビクトリア日系人学校」について

帰国した子どもたちについて調べるため、2018年3月18日・19日にペルーのリマ市にある「ラ・ビクトリア日系人学校」を訪問した。2回に渡って、日本からペルーに帰国した子どもたちのインタビュー、そして、日本語の授業を担当している教員と話し、学校の様子を見学した。

ペルーのリマ市にある日系人学校で多くの帰国者を受け入れた学校の一つとしてこの「ラ・ビクトリア日系人学校」が挙げられる。

1948年に設立され、今年で設立70年の歴史ある学校、現在約550人の生徒数が在籍している。入学試験が行われず、私立学校の中でも授業料は比較的に準備しやすい。また学校のHPで「日本から帰国した児童生徒にペルーの教育制度に適応できるプログラムを組んでいる」と掲げており、日本から帰国した子どもたちのための適応教室そして

日本語ができるスタッフが揃っている。適応教室では、スペイン語の勉強、読み書きの練習やペルーの歴史について学んでいる。

日系人学校であるため第2言語として日本語が教えられている。非日系の子どもたちも初級者クラスで、ひらがな、カタカナや日本の文化を学んだり、帰国した子どもたちの多くは上級クラスに通い、小学校高学年の漢字を学んだり、日本語で会話の練習を行なっている。

### Ⅲ. 考察

インタビュー調査から、特に帰国の理由、いじめにあった体験、二国間を行き来した彼らのアイデンティティの揺らぎ、そして彼らが見た日本の学校について、彼らのインタビューを引用しながら、それぞれについて説明していく。

#### 1. 帰国の理由

筆者が2013年に調査行ったところ、帰国生のほとんどはリーマンショックの不況後や3.11の東日本大震災の影響を受けて帰国を余儀なくされ、決断した者が多かったが、本調査と前回の調査で大きく異なる点として、帰国目的がある。今回は、解雇されたからではなく、両親がペルーでなんらかの商売を始めるため等の理由、両親の離婚で母親と帰ってきたケースや年老いた祖父母の介護のためなど様々な理由であった。

帰国は初めてではなく、完全に帰国する前までは、1ヶ月などの一時帰国をしているケースが多かった。

保護者から帰国すると言われた時、友達と離れるのは嫌で、日本にいたい気持ちが強い子どもが多かったが、11人のうち、二人はペルーに行くのは外国で生活するような楽しみであったことが語られた。以下に対象者の語りを引用する。

対象者Hさんは6年生の時にペルーに一時帰国をしていて、日本に戻った後、両親から完全にペルーに戻りたい話を聞いた。両親に、小学校を卒業してから日本の中学校を体験したいと願って、中学校1年生の1学期まで滞在した。その帰国当時の体験は次のように語っている。

中学校1年生で帰ってきて、苦労しました。最初は日本に帰りたいと何度も思いました。12月に帰ってきて、すぐに1月から夏期講習があって参加して、2年生に入学した。

ペルーに戻りまだ一年も経っていないBさんは帰国することを親から聞いた時の気持ちは次のように語る。

なんか、最初は嫌だった。ペルーは好きで遊びで来るくらいはいいですけど、こっちで住むことになったらちょっと…

移動する時に友達と離れることが辛いとあげた者も多かったが、Cさんの語りでは仲良しの友達と一緒にクラブ活動したかったけれど、帰国することになって、その体験ができなかったことを次のように語った。

ちょっと嫌だった。友達がいっぱいいるから。…俺一番嫌だった。4年生からクラブがあるんで新しいクラブが出たんだけど、友達と一番大好き、休み時間の時いつもドッチボールを遊んで、で新しいクラブでドッチボールクラブに入って。でも、ペルーに行くことになって…

また新しい国に行く旅行感覚でペルーに向かったケースもある。Aさんは小学校低学年の時に帰国しているため、

帰国の体験について肯定的に語る。

ペルーの時、飛行機で違うところに行くのが楽しみだったから、別に大丈夫だったけど

また、Gさんは唯一母にペルーに行きたいことを伝え、自分の意思で帰国したケースである。

…外国に行くみたい、日本のことももう知ってたし、勉強した経験もしたから、新しいところに行くみたいだったから、お母さんに行こうと言いました。

友達と離れるのは辛かったです。お母さんは、帰って来たらもう中等部を卒業までペルーに残るとはっきり言われていた。でも日本いつかには戻るとずっと考えました。(スペイン語：筆者訳)

彼女は小学校を卒業すると同時にペルーに戻り、中等教育の一年に入学した。母には中等教育を卒業するまでペルーにいないといけないと言われ、ペルーの中等部に5年間通って2016年に卒業した。

日本から離れる辛さより、ペルーで適応できるまでの過程が辛い、大変などの語りが最も多かった。

はじめてのペルーだったDさんは帰国することに関しては「普通。悲しくもなかった。」と語ったが、最初の体験どうだったのかという問いかけに関して、

辛かった。夜がうるさくて眠れない。日本と比べると汚いから落ちつかない。家でお父さんたちが、先生を呼んで勉強してそれが辛かった。

Iさんは80代という高齢の祖父母の介護のため帰国することになったケースである。中学校2年生だった彼は当時の様子はこう振り返る。

ある日、おじいちゃんから電話があって、もう年なので、一人で生活はできないと言われました。母が不安になって、母と弟と3人で帰った。お父さんは日本に残って仕事をしていました。…最初は不安だった。基本的なスペイン語しかできなかつたから。(スペイン語：筆者訳)

Iさんペルーの学校に入学するまで家庭教師に半年間教えてもらいからペルーのリマ市にある一般の私立学校に入学した。

半年の間、近所に先生がいて、家庭教師として国語に当たるスペイン語とペルー史を教えてくださいました。最初すぐに学校に入学はしなかった。まずその家庭教師に教えてもらい、半年後学校へ入学しました。(スペイン語：筆者訳)

Jさんは両親の離婚により母と帰国となったケースである。15歳だった彼女に母親は、一緒にペルーに帰るか、日本に残るか自分で決断するよう選択が与えられた。また対象者11人の中でペルーと日本の二国間での移動経験が何度もあったケースでもある。

日本で卒業して、またこっち中学校という変な感じ、ずっと後悔をしていた。なんで一人で暮らすの、親戚と暮らすなんて言わなかったかな。おばあちゃんもおばあちゃんだったし、妹もまだ小さかったから、さすがにお母さん一人で引っ越させるわけにも行かないんで、私もちょっとした支えにならないといけないんで、しょうがなく来たんですね、ここ来て、「ラ・ビクトリア」に入って。いやいや入って、また友達作るのをめんど

うくさいな。やっぱりずっと今まで友達作って別れて、友達作って別れて、強制的にされてたんで、でまたゼロからスタートというのはあるんで、あ、またか、すごく慣れているんです。で友達を作っているうちに、ああやっぱ自分と同じ状況の人いるんだな。自分だけじゃないんだな、だからしょうがないんだ、こっちにいるし。と思って今に至りますね。

Jさんは中学校を卒業して帰国後日系人学校の中等教育の4年生に編入した。語りにあったように、母と帰る決断を最初後悔したことがあるけれど、自分と同じ体験している生徒との出会いで「自分だけじゃないんだ、だからしょうがないんだ」と同じ移動の経験ある帰国生徒という仲間との出会いを通して前向きな姿勢で適応に励んだ。また、新しい環境には「慣れていた」や「こっちにいるから仕方ない」というようなコメントから「強制的な移動」からJさん自身が作っていた適応力が読み取れる。

またHさんの語りでも、日本語を使える環境にいること次のように語った。

日本から帰って来て友達がいきました？ いっぱいいました。しみりしますね。学校に入って日本語を時々喋る友達がいると、懐かしいなと思う。

対象者の帰国理由は様々であったが、日本を離れる時の思いや適応できるまでの辛い体験は共通であった。両親の母国であるため、家庭教師をつけられ、直接学校側に行き配慮を求めたりなどの働きかけを行っていたことが伺える。

インタビューを通して日系人学校に通った者では同じ日本帰りの生徒がいることで、移動の体験を共通している仲間と分かち合える、日本語が話せる部分が適応しやすい環境が作っていると見える。また、一般の私立学校に通った者には「日本」という外国から来た生徒として珍しく感じ、生徒から暖かく迎えられたことも伺えた。

## 2. いじめの体験した子どもたち

いじめ、差別などを体験している子どもたちは11人中6人であった。文部科学省はいじめの定義として「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものも含む。）であって、当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」としている。児童生徒が苦痛と感知している行為がいじめであると捉えている。

インタビューでは、いじめの体験があったかどうかを直接質問せず、日本の学校で嫌な体験があったかという質問に対して対象者が苦痛に思った体験を語った。友達をかばうために自分がターゲットとなったり、カバンや靴など物を隠されたりする、トイレに閉じ込めて水をかける行為やネットでのいじめまで辛い体験を次のように語った。対象者Bさんに日本の学校で嫌な思い出があったかと聞くと、このように体験を語った。

ラインで、グループラインやっていて、その中のAちゃんと、もう一つ対一のチャットでなんか普通に話していて、で、その後に急にグループラインでその子から死ね死ね死ねときて、で、それでなんか、死ねって言われたり、あとなんか、言うことが聞かなかつたら暴力ふるうよとか言われたり。  
それがみんなに言われていたの？ 私だけ…そのAちゃんが、私と話していると、私が恵まれていない、みんなに嫌われているとか、ずっとそういうことが言ってきて、で自分一回、それだったら、私だってずっと日

本にいたいのにペルーに行かないといけないんだよ。私も辛いんだよと言ったら。(彼女は)君ハア、何言っているの。死ね、死ね、死ね…

Bさんの体験は最近日本で問題化になっているネットいじめ・サイバーいじめの最も一般的な例である。筆者が他の調査で不登校になった子どもの例でもこのようなグループラインによる攻撃があるが、些細な行き違いから突然言葉で攻めたり、嫌がらせをしたりと高学年の小学生ではよく見られるケースである。

またDさんは、小さい時からいじめの体験を次のように語った。

嫌なこと、小さいときからいじめられてて、4年生まで、言うこと聞かなかつたら殴りに来る。…辛かったんで、ペルーの方が危ないからもっといじめにあうかなと怖かった。けど、結構友達が作れてよかったなと思います。

誰かに伝えた。虐められていたこと。「伝えてませんでした。」嫌なことも言われていた？外国人だからとか。外人とか言われなかったけど、悪口より、殴られる方が多かった。

Dさんのいじめは身体的な行為が多かったようで、日本より危ないペルーではいじめにあうかと帰国前から不安が見られた。

またGさんは友達をかばうため、自分がいじめのターゲットとなった体験を次のように語る。

私の日本人の友達をいじめられていて、私もあまり何もしなかった、「大丈夫？」とか「もう終わるから」としか言っていなかったけれど、ある日、バスケットボールを頭に投げられて、おでこがかいかとかデブとか言われてたけれど、その日は頭にバスケットボールを投げて、で、自分に何が起こったのかわからないけれど、私が立って、「やめて」と言い、彼らに立ち向かった。でその日から私もターゲットとなり、お母さんに相談して、叔母さんもいて、いじめられているなら、黙っているより、自分から何か行動しなさいと言われて、である日、本当はしてはいけないと分かっていたけれど、もうあまりにも嫌になっていたから、「国に帰れ」とか「外人」、「デブと一緒にいるから私もデブだ」と言われたり、私にも物を投げたり、カバンを隠したりしていた。彼らだとわかっていた。いつも笑ったりしてたから。それで何があったか分からないけど、私は彼を殴った。で、まあ、彼が保健室に行って、で先生がそれで気づいて、その時にすべてのことを先生に話をして、で先生が彼に、謝るようにして、で彼の両親と私のお母さんを学校に呼んで、校長室で話し合いをして、問題を解決した。彼は中心人物、番長みたいだった。最初はあまり話はしなかったけれど、関係は良くなって。小学校3年生の時だった。(スペイン語：筆者訳)

Gさんは母や叔母に相談して、「黙っているより、行動を起こす」ように勧められ、いじめっこに立ち向かって相手を殴ったこと語った。次のIさんも同じく、反撃して相手を殴ったことを語った。

小5の時、ラテン系の生徒に外人と言われたり、私は我慢していたけれど、ある日もう我慢できず、その子を叩いた覚えがある。(スペイン語：筆者訳)

Jさんは日本語が分からないためいじめにあっていることが分からず、言葉が分かっていく次第にいじめにあっていることと気づいて、そのピークとなったエピソードを次のように語った。

…でその後からいじめがスカレーションをして行って、教科書が消えるわ、上履きはないは、傘が壊れるみたい、で一番辛かった時は、女子上トイレに閉じ込められて、上から水をかけられたり、何年生の時？

それは小学校5年生、でやっぱり親も日本語も話せないし、校長先生も外国人嫌いだったんで、学年集会とか、全校集会とかでは、遠回しに外国人は大変ですけど頑張ってください。障害の子みたいな扱いだったです。国際ルームの先生はそうではなかったけど、担任の先生はやっぱり面倒臭いなみたいな感覚、今から気付けばそんな感じだった。…そのあとは、普通にずぶ濡れだし、そのまま教室に帰るのもあれだし、保健室に行って、国際ルームの先生呼んで、すみませんこういうことがあったので、このまま早退しますと言って、で、「あ、じゃ、とりあえずタオルは持ってくるから、ジャージも持ってくるからそれで帰りたい。」で乾いたまま家に帰り、で、おばあちゃんはどうしたのこんな早く、午後2時くらいに帰って、11時くらいだったんで、学校出るのは3時だし、今日どうしたのと聞かれ、お腹痛いから早く帰ったと、そうやって後回しにしていた。おばあちゃんもおばあちゃんだし、わざわざめんどうみてくれてるし、言ってもね。

嫌な言葉言われましたか。外国人だからとか？言われましたよ、そうとう。なんでここにいるの？お前日本語も分からないし、読めないしなんでいるのみたい、いや、私はこっちが好きできているわけではないから、申し訳ないなとこっちが思っているけれど、わざわざそう言われるまではないな。で、もちろん、自分ひとりで全部抱えていたので精神的にも来てたし、でも親に泣いているとか、結構格好つけたがりなので、親に泣いている姿は見せたくないんで、シャワー浴びて、そこでダツと泣いていましたよ。

筆者は三重県の小・中学校に7年以上に渡って様々は保護者と関わり、その中で南米出身の保護者の多くが子どもがいじめに合うことを最も恐れ、我が子に「やられたらやり返す」ことを話す場面何度も目撃した。G、I、Jさんいじめを耐え抜いたけれど、語りにある「何があったか分からない」、「もう我慢できず」、また本論文には載せていないけれど、Jさんの体験でも「ぶっち切れてビンタしたんですね…」と、日常耐えていたいじめに精神的に追い詰められる反撃するという行動に至ったのではないか。この5ケースの中で、学校に相談したケースはなく、保護者に相談したケースも一人しかいなかった。保護者は会社でも「外国人扱い」で大変な思いをしているので、いじめの話はしたくなかったなどの理由を語った。また担任の先生がいじめにあっていることに気づかない、両親にも教員にも相談できなくて一人で抱え込んでいるケースが多かった。このようなケースが外国にルーツのある子どもたちに限らず現在いじめ苦しんでいるすべての児童生徒に当てはまる課題である。

また対象者のGさんとIさんはペルーと日本のいじめの行為を比較して次のように語った。

日本でのいじめ、みんなが見て見ぬ振りをしていた。手伝いたいけれど、何も言わないみたい。まあ、私もそうだったと思う。でもこっちに来て、一人の子が、もう一人をからかったり、荷物を勝手にとったりしていました。で、周りのみんなは口を出して、「もうやめて」と彼を守ったり、教室のみんなが声を出して、先生に、誰々が始まったんです。それを見てとても驚きました。(スペイン語：筆者訳)

Iさんはいじめの場面は両国で目撃をし、いじめの行為に異なる部分はあまりないが、いじめられている子と、周りの目撃者の介入の仕方、反応に差があると指摘している。

もちろん日本でいじめをみることもあったし、こっちでもいじめをみました。特に異なる部分はないが、こっちではまだ、自分を守ろうともしっかり立ち向かったりすることがある。日本ではだまって、何も言わない。ここ



では周りも、何か手伝わないといけないという思いがある。静かに先生の所についていじめている場面を見ましたなどを報告するものもいれば、自分から声をあげて、「どうしたんの」など立ち向かう。日本では何も言わない。(スペイン語：筆者訳)

上記の2ケースでは傍観者の声を上げる行為「もうやめて」「静かに先生に報告する」、「みんなで声を出して」先生に報告をするなどの介入、直接対応が見られる。これが両国で大きく異なる点として挙げられている。対象者の語りにあつたように「日本人はよく見て見ないふりをする」これは関わったら自分が次のターゲットになることを恐れるからなど、様々な理由があるが、いじめの被害を最小限にとどまるための重要な要因である。

### 3. 帰国後のアイデンティティの揺らぎ

対象者に自分「何人」だと思うか、アイデンティティについて悩んだことがあるか質疑を行った。その答えは次のように挙げられる。対象者Aさんは次のように語った。

何人と聞かれたら、「日系人」何故？「ペルーが好きけれど、日本も好き」

Jさんに自分「何人」だと思うかという問いかけに最初は何人であるか気にしないことを語り、話しているうちに日本とペルーにいた自分は「外国人扱い」された体験を次のように語った。

関係ない気がする、自分は何人だからこうしないといけないとか、そんなのは、多分オープンマインドだと気にしない。悩んだことがありますか。ありますね。家ってどこ、あっちに行ったら若干ハーフ、「ハーフだね」ってたまに聞かれて、まあハーフですと言えるけど、あれ、自分あっちで生まれたけど、国籍こっちだし、こっちに来て外国人扱いだし、あっちでも若干外国人扱いだし、私は何人かなすごく疑問…日本に行くの、帰るの？日本に行ってくるか、帰ってくるかよくわからないね、その答えが。  
でもやっぱり最近、生まれたのは日本だから、日本帰る、ペルー行くと言います。

また同じくJさんに他の対象者はよく「日系人」であると語ったと伝え、それに関してどう思うかと尋ねると、

日系人だと思います。どちらかと言えば日系人だと思う。こんな顔もしていますし、スペイン語も話せるし、「サルチパパ」(ペルーの料理)も好きだし、でも「うどん」も好きだし。日本のいいところを持ってこっちに住んでいる。あっちではペルーのいいところを持って住んでいる。・・・(スペイン語)踊るのを好きだし、パーティーに行くのも好きだし、誰にも許可を取らずにバーベキューするのが好きだし、でも反対に、0時を過ぎるとうるさくしないこと知っているし、ポイ捨てをするのはダメだと知っているし、(日本語)そういうのは自分の中では日系人だね。

と両方の言語を交えながら日系人であることに肯定的で両方の文化を知っていることを語った。

Dさんの語りでも彼らなりに、ペルー人と日系ペルー人の違いについて次のように語った。

ペルー人はそこらへんでごみポイ捨てするけれど、日系人はゴミ箱に捨てるか、家にゴミを捨てるか、ゴミ箱を見つけるまで持ち歩くとか。  
自分は何人だと思う？ペルー人、日本にいたとき自分は日本人とってた。

悩んだことある？ そんなにない。

Eさんは母ペルー、父はブラジルであるが、両親の離婚で現在母とペルーで暮らしている。

ペルー人。悩んだことない。ペルー人、こっちで生まれたから。

日系と言われたらどう思う？ はい、日系だと思う。

でもあなた自身の中ではもっとペルー人だと思っているかな。いや、ペルー人、日本人とブラジル人だと思う。

彼はブラジルに移動した経験もあって、ペルーで生まれ、国籍ペルーであるため、「ペルー人」と答えたが、3カ国のルーツを持っていること肯定的に受け入れている。

Fさんは何人かという問いかげに「生まれたのはペルー」、しかし、「日本人でもない、100%ペルー人でもない」二国間の経験があるため、「日系」であることに誇りを思っていることを語った。

何人と聞かれたら、日系かな、国はどこと聞かれたら、生まれたのはペルーだと答える。日系である。

日系であることはなに？ 日本人でもないし、100%ペルー人でもない。意識的に言っちゃうん、「日系人」二つの国と触れ合えて、比べることができるから、やっぱり日本人日本人という人とペルー人ペルー人という人とやっぱり違う、二つの国と触れ合っている立場だからそういう面では貴重な体験をしているな。誇りに思いません。

Iさんは一般の私立学校に通い周りに日本から帰国した子どもたちがおらず、日本にいた間はペルー人、ラテン系であるとはっきりしていたが、ペルーに戻りアイデンティティについて悩んだ体験を語った。

ペルー人、日本人。私はペルー人だと思う。

こっちに帰ってきたとき悩んだことがある。日本では自分はペルー人、ラテン系と言っていましたが、こっちに来たとき、日本で生まれたならあなたは日本人だと周りの皆に言われ、でも国籍はペルーだし、血もペルーの血が流れているし、でも兄はこっちで生まれたけれど、彼は日本人だと思っている。帰化もしたし…  
(スペイン語：筆者訳)

Gさんは日系ではないが、日本で生まれ、小学校は日本で過ごした。ペルーでは一般の私立学校に通い、国籍はペルーであるが、日本で生まれ、日本で生活した経験が長く、心の中で自分は「日本人」であることを主張している。

何人？ ペルー人だと答える。

悩んだことはあるか。向こうではペルー人だと言います。外見的にもペルー人だし、家族もみんなペルー人だから、そのため向こうではペルー人だと言います。ここでもペルー人だと言います。日本人だと言っても、「日本人？」「日本人っぽくないし」と言われるのは嫌だし。前日本人だと言った時、でもなんでこうじゃないのとか色々聞かれるのが嫌、いちいち、自分の話をすると面倒くさいだし、

自分はどう思う？ 自分は日本人だと思う。その価値観を持って育ったから。

私はペルー人とは違う感じがする。私は生まれ育った価値観は違う。いつも先生の話聞いて守ったり、試験

の時カンニングしているのを見てとてもショックを受けたり、みんなに答え教えてと言われたり、でも言うのはダメだと思って、私が持っている価値観を失いたくない。(スペイン語：筆者訳)

GさんとIさんも一般の私立学校に通った経験がある。周りに「日本帰り」の子どもたちがいなかったため、「日本から来た」けれど、日本人ではないことを周りに説明する苦痛が語りの中では感じられる。

またGさんと同様に、Iさんも自らが持っている日本的な価値観について次のように語った。

日本人っぽい顔はしていないけれど、しぐさ等日本人的部分がある。それでよく、友達にからかわれたり、日本人だと言われたりしました。基本的に丁寧、知らない人にも、敬語を使って話します。後、遅刻しないようにすごく気を付ける。周りの人もわかっている。遅れないようにして、I君は時間通りに来るから。相手が遅れると怒って帰るときがあります。少し学んでほしいです。いつも日本のことを話したりしているし。(スペイン語：筆者訳)

GさんとIさんは外見・容姿は日本人のようではないが、日本で身についた価値観、しぐさなどから日本の良いところを意識して行動している。また「ペルー人」とは違う価値観を持っていることを強調している。

このようなアイデンティティの揺らぎは、日系人学校に通う対象者にはなかったことだ。「日本人」でもなく、「ペルー人」でもなく、自分が属する集団、場を探し求めているようだ。一方日系人学校に通った対象者のほとんどは、自分のことを迷わず「日系人」とであると表現したり、日系であることの誇り、同じ体験をしている仲間と日系コミュニティの「ラ・ウニオン総合運動場AELU」などの施設を学校の仲間や親戚同士で利用したり、組織としての居場所があると言える。スエヨシらの研究ではペルー社会に適応できるため日系人学校が果たす役割として「これらの学校では、ペルーと日本人の2つの文化の融合を経験することができるため、「カルチャーショック」が最小限に止まる」(スエヨシ・ヤギ2011 pp.111)と指摘した。また同じ体験を共通している者が多く、「何故日本で生まれ、何故帰国したのか」に対して周りの理解がある中、自分の歩んだライフストーリーを「一人の体験」としてだけでなく、「日系」であることとして自然に受け止め、国籍を超えたトランスナショナル・アイデンティティを形成できるような役割も果たしているのではないかと考えられる。

しかし、Kさんの体験にあるように、日系コミュニティから除外されるのを恐れ、直接関わろうとしない、コミュニティに入りにくい環境もある。

…日系のコミュニティには一度も参加していないので、あなたの名字は？その名字は何みたいな、でもあえて入ろうと気がしないし、入るのに時間を費やさない。だって日本で経験したような(差別)、それ以上の体験はしたくないから。私の祖国、祖父自身の子孫によって差別されるのはもっと苦しいでしょう。ペルーに到着したとき、私は初めにAELUに行ったけれど、変な目で見られた。だから意味ないと思う。AELUには私の親戚側、～家という名字は一度も関わったことないから、で例えば30年後に帰った人がいますが、彼らは既にコミュニティに関わっていて、直接関係がなくても、あなたは誰々の姪かみたいな繋がりが残っています…(スペイン語：筆者訳)

日系ではありながら、日系コミュニティと交流を持っていることと限らない。施設が会員制である場合や、ペルーの日系コミュニティのネットワークがすでにできているため、初めて関わろうとする者に入りにくい環境があると考えられる。日本の名字があっても外見、容姿で差別される体験も少なくない。

#### 4. 日本の学校とペルーの学校について

対象者に日本の学校とペルーの学校の、教員、良いと思った点、改善する点について質問を行なった。

Aさんの語りでは学校施設の比較をするときに一般的に子どもたちが良く答える、校内にプールがあったことを挙げた。しかし、ペルーの学校の方が楽しく、授業が面白いと語った。

日本にはプールがあったから夏には入れるから楽しかったなと思ったり、ここはもっと友達ができたから、楽しいなと思ったり。日本の学校とは違う、もう少し明るく、面白い授業で実践的な部分があり、例えば、国語、U型に座席を並べ、グループワークし、意見交換やディスカッションを行ったりする。

対象者の語りはすべて引用することができないが、多くの場合は公立学校で関わった教員への愛着、尊敬、厳しさをさえ肯定的に受け止めているケースが多く見られた。Dさんは次のように語っている。

日本人の先生の方が厳しくて、でもそれのおかげでもっと覚えやすいと思う。ペルー人の先生は？  
厳しくない先生が多いかな。厳しい先生もいる。

Eさんもペルーの学校に比べると、日本の方が規律正しいことを挙げている。

日本の学校の方が規律して、規則を守ったりしていたと思います。遅刻はせずに。そう、日本の学校の方が規律があると思う。例えば列で並ぶ時、時間など守られている。遅刻しないものもある。(スペイン語：筆者訳)

Fさんの語りでも、ペルー人の教員が甘い、叱るより注意する程度であることを否定的に述べている。

こっちの先生は優しい、というか甘い、日本の先生に比べたら甘い感じがする。例えば、怒られるときとか、ここは怒るというより注意する。いうことが聞かなかつたら、減点される。日本は、しかるときは違う。

またJさんの語りでは、教員免許がない教員が多いことを指摘した。特に私立学校では資格がなくても非常勤として専門となる教科を担当することは可能である。

こっちの先生って先生じゃないです。ただ単に、国語の知識があるから国語の先生になるとか、教員免許を持っていない人が多い。でも知識として知ると、教えるのって全く違うことだと思う。知っているから教える技術があると限らない。で例えば、私みたい分からない学生がいるとどう対応していったらいいのか分からない。それが一番嫌だった。疑問が多かったけれど、反抗しているような扱いにされていた。

上記で述べたように全ての対象者が日本の学校施設について、自分たちで掃除すること、整備されたプールや運動場、日本人教員との関わりなど肯定的に受け止めている。しかし、日本の学校かペルーの学校かどちらが自分に合うかと尋ねると次のFさんとBさんのような回答が多かった。

今の現状ではやっぱりペルーかな、日本の友達と、ペルー、日系と一緒に接していると、なんか自分に合っている、話していて、ああ、自分に似た生活をおくっていたんだな、共感はできるし、生活的に慣れててこっちの方が。比べたらどっちも好きだけど、比べたらこっちな。

ペルーに戻りまだ1年も経っていないBさんは日本ではラインによるネットいじめの被害を受けて、現在ペルーの学校での友達関係が楽しいと語っている。

慣れた？ すごい楽しいから慣れるのは早い。日本だったら学校でも友達関係で、なんかだれだれちゃんが嫌  
いってよくあって、こっちはみんな仲良しで、なんか楽しい、よく色々な話をしたり遊んだり…

日本の学校施設、教育制度の良質さ、教員に対しての愛着など肯定的に捉えているが、ペルーの学校の方が楽しい、自分にあっていると語る者が多かった。その一つの要因として学校内での同級生との人間関係、ペルー人の友達、また日系ペルー人という仲間や居場所ができてきていること示唆されている。

筆者が日本で関わったケースでは、学校内でのクラブ活動、クラス内での同級生との良好な関係を持っていた児童生徒が学力的に低いことがあってもスムーズに学校生活をおくり、高校への進学等できたケースが多かった。学校での居場所作り、教室内での人間関係が子どもの適応、進路実現に大きく影響していると言える。

## V. おわりに

本調査では日本で生活をし、保護者の都合でペルーに帰国した子ども・若者たちの語りを引用しながら新たな教育環境であるペルーの学校生活、二カ国間の移動を体験した彼らから見た日本の学校についてインタビューを行った。インタビューでは、筆者は研究者として語り手と対話を行ったが、筆者自身が両国間での移動を体験し、彼らの移動のストーリーに共感する関係性を持って本調査に関わった。そうした関係性により対象者が心を開いてペルーと日本で苦痛に思った体験、アイデンティティの揺らぎについて語られたと感じた。日系人学校に通った経験のある対象者が自分のアイデンティティ、帰属意識を「日系人」として主張することが多かったが、一般の私立学校に通った若者の方が、「ペルー人」か「日本人」、「国籍と生まれた国」でアイデンティティの揺らぎが見られた。しかし、一般の私立学校に通った対象者が少なかったため、今後、一般の私立学校や公立学校に通った対象者数を増し、慎重に検討しなければならない。

本調査に関わった一般の私立学校に通った対象者にはスペイン語でインタビューを行った。日本語が理解できるが、話せなくなってきたことがその理由の一つである。日系人学校に通った対象者は8人中7人と日本語でインタビューを実施した。会話の中では所々うまく表現できないフレーズをスペイン語に変えたりすることもあったけれど、基本的に日常会話ができていない者がほとんどであった。また日本語教師やコールセンターなどで仕事・アルバイトとして日本語を使用している者は2名いた。このように日本語能力の保持のためには日本語を常に使える環境、日本語を話せる仲間が周りにいることが言葉維持のための重要な要因である。また対象者のほとんどが日本語を忘れないように、インターネットでの日本のアニメ、日本の番組を見たり、J-POPを聴いたりして、言葉の維持のため彼らなりに努力している。さらに同じ移動の体験をしている仲間との出会いの場として日秘文化会館で開催される「帰国児童会話クラブ（通称：どんぐりクラブ）」や「おしゃべり会（通称：しゃべらん会）」に参加していることも伺えた。

グローバルな時代では人々の移動は今後も止まらないだろう。冒頭でも述べたように在留外国人数は2013年から増加傾向にある。ペルーでは、80年代の不景気で深刻なインフレや暴動テロから逃げて外国へ移民を送り出していた歴が長く続いていた。しかし、同じ南米のベネズエラから移民が急増するようになった。ベネズエラのチャベス元大統領から、現在のマデウロ大統領による独裁政権により数年前からベネズエラの国情不安によって、海外へ大量流出している。周辺国のコロンビア、エクアドル、ブラジル、チリとペルーに逃避し、ピークとなった2018年8月では、一日あたり3千人のベネズエラ人が国境で入国審査を求める深刻な実態になっている。

筆者は2018年3月ボランティア事業のためペルーのリマ市の経済的に困難な地域にある公立学校4校を訪問行なっ

た。そこでもベネズエラ出身の子どもたちを受け入れ、無償で義務教育を行っていた。各クラスに3人から4人と対応が追いつかない状態になって来ている。このようにペルーは移民の送り出し国でありながら、移民の受け入れ国となっている。

論文内で挙げたように対象者11人は両国の文化を理解し、日本的な価値観、日本で育ったことに誇りに思っている。日本との繋がりを大切にし、両国の架け橋になりたいことも挙げた。同時にペルーの生活にも慣れ、語りにあったように「ペルーの良いところ、日本の良いところ」を持って新たな環境への適応力を持っている。日系企業にとって貴重な人材になるのではないかと考えられる。

帰国後、彼らと日本との縁が切れたのではなく、ほとんどの場合、片方の保護者、兄弟、親戚などが日本に残っている。日本という国は彼らにとって身近な存在であり、彼らの人生の一部でもある。帰国したことで関係が薄くなるのではなく、日本人的な価値観を持っていることを再認識でき、ペルーで生活している。今後も彼らの進路、移動の体験に着目していきたいと考えている。

様々な理由で移動に迫られる子どもたちが、どこの国であっても、教育の保証が得られるよう筆者自身も研究を通して今後も声を挙げていきたい。

#### 【参考文献(References)】

- 藤田結子2012 『「新二世」のトランスナショナル・アイデンティティとメディアの役割－米国・英国在住の若者の調査から』 アジア太平洋研究 37 pp.17-30
- 樋口直人、2011 「経済危機後の在日南米人人口の推移－入管データの検討を通して－」 徳島大学社会科学研究所 紀要論文 24号、pp.130-257
- イシ、アンジェロ 2018 「第9章 在日ブラジル人デカセギ移民－日系人への帰国支援事業の受給者に着目して」 日本移民学会編『日本人と海外移住 移民の歴史・現状・展望』 明石書店
- 川上郁雄 2009 『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育- 動態性の年少者日本語教育』 明石書店
- 川上郁雄 2013 『「移動する子ども」という記憶と力 ことばとアイデンティティ』 くろしお出版
- 河上加苗 2009 「第3章 ペルーの「日本帰り」と呼ばれる子どもたちのことばの教育を考える」 川上 郁雄『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育- 動態性の年少者日本語教育』 明石書店 pp.60-83
- 正高信男 1998 「いじめを許す心理」 岩波書店
- 文部科学省 2010 生徒指導提要 教育図書株式会社
- 門間晶子・浅野みどり・野村直樹, 2010年 「ナラティブ研究の可能性を探る－シングルマザーの社会的苦悩を通して－」 家族看護学研究, 第16巻 第1号, pp.21-32
- 額賀美紗子 2014 「越境する若者と複数の『居場所』－異文化教育と居場所研究の交錯－」 『異文化間教育』 40, 1-17
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス, 2013 「不況後にペルーに帰国した日系の子どもたちの現状」 梶田叡一『教育フォーラム52 新しい道徳教育のために徳性をどう育てるか』 金子書房 pp.127-136
- Suárez-Orozco, C. (2004). Formulating Identity in a Globalized World. In M. M. Suárez-Orozco & D. B. Qin-Hilliard, *Globalization: Culture & education in the new millennium*. University of California Press & Ross Institute. (pp.173-202)
- スエヨシ アナ, 2015, 「第3章 ペルーと日本を行き来する子どもたち－日系人児童生徒の二重準拠枠の構築を視

野に入れて」田巻松雄・スエヨシ アナ 『越境するペルー人 外国人労働者、日本で成長した若者、「帰国」した子どもたち』宇都宮大学国際学部国際学叢書第5巻 下野新聞社 pp.150-171

Sueyoshi Ana, Yagui Laura “Grado de adaptación/Inadaptación de los Niños Peruanos luego de su Retorno de Japón Los retos de un nuevo ambiente educativo y de un hogar fracturado entre dos países” 宇都宮大学国際学部研究論集 2011年 第31号、pp.99-116

渡邊満 2013 『「いじめ問題」と道徳教育－学級の間関係性を育てる道徳授業－』株式会社EPR

やまだようこ編 2000 「人生を物語る」ミネルバ書房

山ノ内裕子 2014 「トランスナショナルな『居場所』における文化とアイデンティティ－日系ブラジル人の事例から－」『異文化間教育』40, pp.34-52

参考ホームページ <http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.692.1108&rep=rep1&type=pdf>

ラビクトリア日系人学校HP：<https://lavictoriagakko.edu.pe/> (2018/6/29 閲覧)